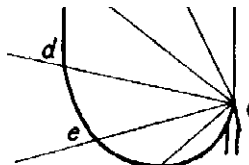


第九回国際デザインコンペティション・大賞受賞

## e + plant = planet

P.6 Project Report より

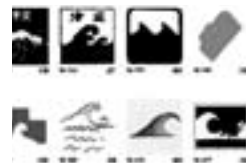
デザインだけでは世界は変わらない。しかしデザインが示すビジョンは、世界を変える可能性を持っている。いかに理想像をイメージするか、その構想力が求められる。



### Special Theme

一本の木に、「カタチ」の世界を観る

西沢 健



### Today's Eye

防災ピクトグラムシステムの開発

吉田 治英



### Project Report

e+plant=planet

柴田 巖朗



### Project Report

元気がでる小さな乗り物

山田 晃三



### Project Report

コンパクトカメラ・デザインの中味

佐久間 敏暢



### Project Report

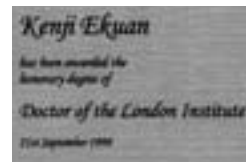
ベルチェ方式電子セラーの誕生

阿久津 雄一



### People & Activity

GK 設計、デザイン総研広島が都市景観大賞(小空間レベル)を受賞



### People & Activity

栄久庵 GKグループ会長、ロンドン芸術大学より名誉博士号授与 他

# 一本の木に、「カタチ」の世界を観る

「一本の木」に対する見方は、千差万別。モノの観方も同様。デザイナーに、今求められているもの。それは、自らの視点を持ち、モノに秘められた「美の秩序」を発見すること。

西沢 健

一本の木から

仏陀は菩提樹の下で悟りを開いたという。そのようなことを考えながら、まず目をつぶり、「一本の木」を思い起こしてみよう。

爽やかな緑の枝振り、真直ぐな力強い幹。紺碧の空に浮かぶ勇壮な姿。

暑い日にはその木陰に涼を求め、またある時には木の葉の奏でる音楽を聞き、詩を詠み、雨の日には雨宿りの格好の場を得る。そこには、人々の安らぐ木の姿がある。

バードウォッチャーには、また違って見える。望遠鏡でずっと近づいてみる。野鳥の巣が見える。梅雨前に巣立たせようと、親鳥が必死に、小鳥に試練を与えている。さらに近づくと、透明な蜘蛛の巣が、もっと小さな虫達を音も無く待ち続けている。「一本の木」を廻り、様々な生命が息づいて見える。

また地球環境問題が熱く議論される今日、木々の緑に環境浄化を想起し、緑溢れる田園都市に憧れる人々も多々ある。

もう一つの目

一方、木々を通じてモノをつくる人々は、また違う目で木々を観るだろう。

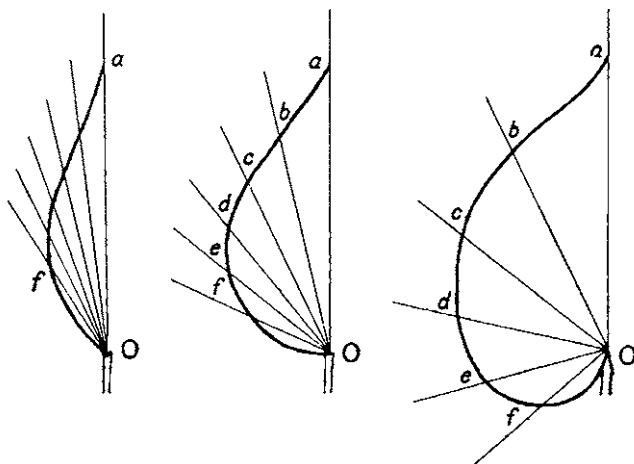
例えば船大工は、船の材料として、建物大工は、柱材として、床材として、木を吟味する。幹の表皮に興味をもち、「工芸の粋」を創る人たちもいる。

そして、風に舞った種を追い求め、新天地での見事な造園を実現する人たちもいる。

また画家は、木の姿から様々な絵画を描き上げる。木の葉一枚一枚を丁寧に精密描写する者もあれば、モンドリアンのように構成主義の絵画を提唱した者もいた。人々それぞれの見方があり、木々との関わりがある。

隠された秩序の発見

生物の相対成長に関する概念を構築したことで高く評価されている、生物学者、ダーシー・トムソンは、その原著「成長と形」(1917年刊)で、生物のかたちの不思議について、様々な記述を行っている。一枚の木の葉の成長過程にみる、驚くべきかたちの変容。一見乱雑・無秩序に見えるかたちの中に潜む、様々な法則と秩序。単純な原理の積み重ねの上に、複雑で高度な形が現れる。それは数学的な面白さであり、隠されたパズルのように形の秩序が存在する。すなわち、「美の秩序」に通ずる。



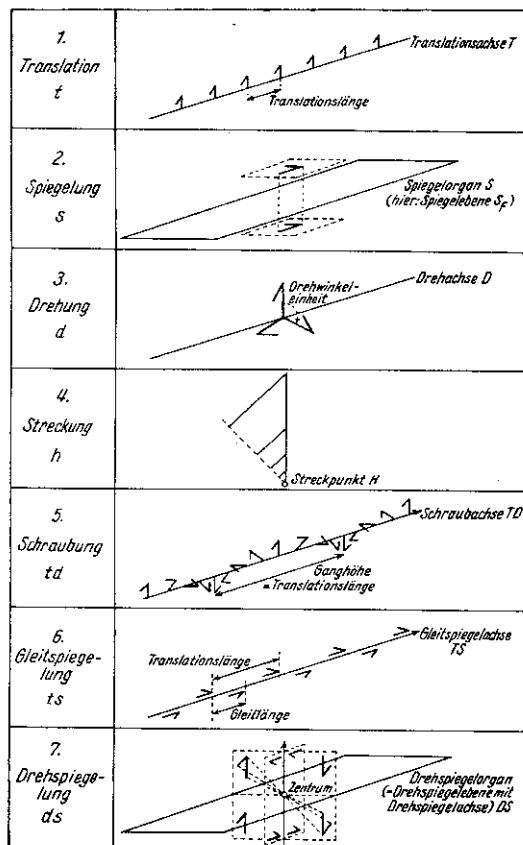
放射線座標系と双子葉植物の葉。(左)槍先形の葉 (中)卵形の葉 (右)ハート形の葉  
 (「GROWTH AND FORM」D'ARCY WENTWORTH THOMPSON 著、CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 1963 年より)

### シンメトリーの美学

一般に「シンメトリー」というと、対称形の中に、モノとモノとのバランスと調和がある状態だと思われがちだが、実はもっと広い概念がそこにある。

ドイツの学者、ロター・ウォルフとロバート・ウォルフの研究によると、シンメトリーには、13種あり、それぞれに特性を持つ。「等間隔に並んだかたち」「スパイラルに展開するもの」そしてそれらが「立体的に構成されたもの」など、多くの類型がある。

[symmetry]の語源は、ギリシャ語の「同じ尺度」から来ており、「一つの秩序によって構成された、均衡・調和状態」を称するのである。これは、科学者の視点で発見された「美の秩序」と言えよう。それをよりどころとした表現を「知の形」と言う。



シンメトリー 13種

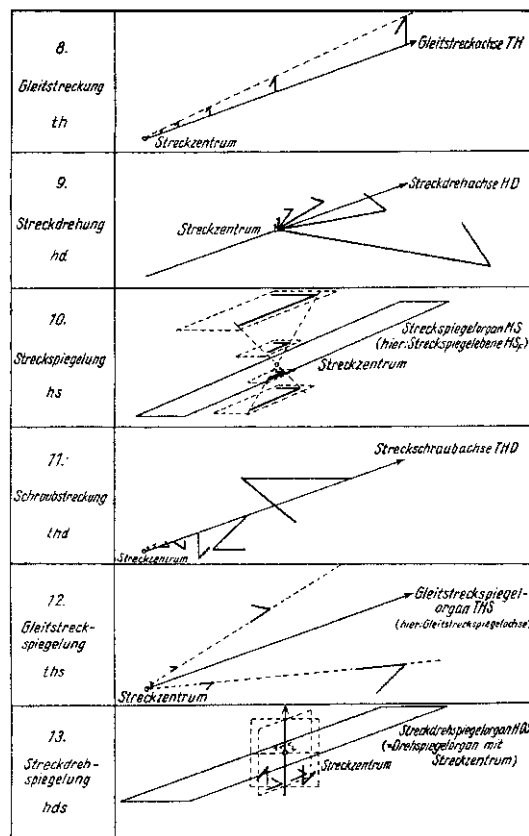
(「SYMMETRIE」K. LOTHAR WOLF & ROBERT WOLFF 著、BÖHLAU - VERLAG MÜNSTER 1956年より)

### モノづくりの視点

冒頭に述べたように、「観方/見方/視方」は、人により、立場により、また時代により異なる。私達は、モノをつくる専門家である。意味有るかたちを与えるプロフェッショナルである。では、モノの存在意義と、かたちの「よりどころ」を何処にもとめるのか。

それはまず、しっかりした視点の確保に始まる。デザインする対象物が、どのような時代・社会背景にあるのか。かたちをつくるその「動機」「目的」「目標」は何処にあるのか。そのかたちの結果、人々は、地域は、社会はどのような恩恵を蒙ることができるのかを、しっかり見つめねばならない。デザイナーとしての確実な視点を独自に獲得せねばならないのだ。自らの立場を明確にし、「一本の木」を凝視することが今必要である。そしてその中からこそ、新しい用途を発見し、美しいかたちを創造することが出来る。

(にしざわ たけし：GKデザイン機構代表取締役社長)



# 防災ピクトグラムシステムの開発

防災研究者とデザイナーの共同研究による国際防災に役立つピクトグラムシステムの提案と今後の展望。

吉田 治英

はじめに

20世紀最後の10年間を自然災害の軽減のために世界が努力しようという「国際防災の十年」(IDNDR: International Decade for Natural Disaster Reduction)活動が国連主導のもと行われている。わが国は国連における実質提案国として、また防災先進国として、1990年からスタートしたIDNDRにおいて、物心両面から中心的な役割を果たしてきた。IDNDRを契機として世界の自然災害による被害軽減のための具体的かつ継続的な活動が期待されている。

国連加盟の各国や地域は政治体制や経済的発展段階の点でもさまざまである。防災の観点でも、それぞれの国や地域を襲う外力も異なり、社会の防災力も異なっている。そうした多様な状況のなかで、まず求められているものは、防災に関する理解力の向上である。

そのためには、それぞれの国や地域の防災努力に共通の基盤を提供でき、誰もが理解可能な「防災のための共通言語」である。

国際的な防災の推進にとって言語の障壁が大きいことは十分認識されており、それを克服することがIDNDRのひとつの目標であるともいえる。たとえば土岐憲三先生の編により国際防災の十年国民会議から刊行された「多言語防災用語集」はその典型的な例である。本研究の目的は直感的に理解が容易な絵文字・絵記号の体系を整備し、自然災害の軽減を目標とした防災ピクトグラムシステムを構築することである。

具体的には、文化を異にする人々が集まる空港や国際的なイベントで用いられる絵文字・絵記号による表示システムを、防災分野に関して開発し、その著作権を放棄することで、世界の人々に利用してもらえる「国際ピクトグラムシステム」として提案すべきであると考えている。

## 防災研究者とデザイナーの共同研究

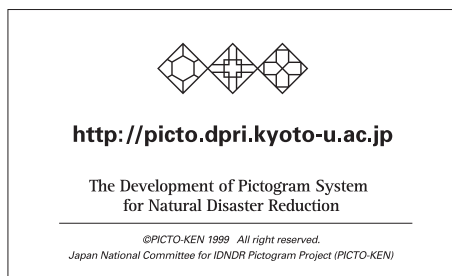
前述のような主旨のもとに、本研究活動は京都大学防災研究所、林春男教授を中心に1997年4月からGK京都を事務局としスタートした。

この研究会には防災研究者、グラフィックデザイ

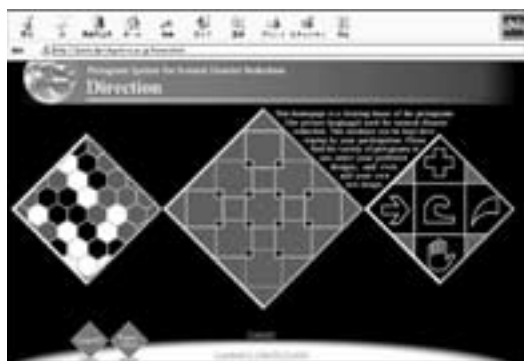
ナー、インダストリアルデザイナー、環境デザイナーが参加しており、月に一度の割合で研究会を開催してきた。その間、防災に関するピクトグラムのレキシコンの確定と文法の整備、防災ピクトグラムを用いた防災のモデルの構築、現実の防災への応用などを議論してきた。防災研究者の視点から、どのようなピクトグラムが必要か、デザイナーの視点から、より解りやすく、美しいピクトグラムの制作、実際のサインへの展開など、お互いの専門性を発揮しながら共同研究を進めてきた。また研究会全体としてピクトグラムを体系化することが重要な目標であることも確認している。

これらの活動内容を中間的に広報するため、第8回地域安全学会(1998.10.30～)、第6回日米都市防災会議(1999.1.14～)などにおいて研究発表を行い、反応と評価をみながら活動内容を検討、修正してきている。

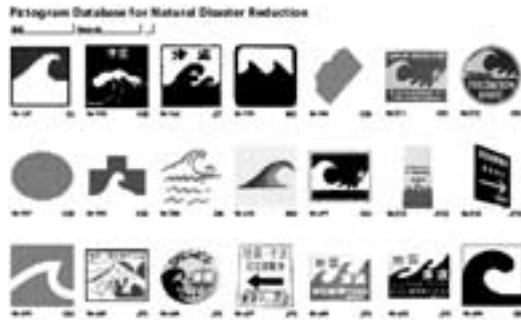
本研究活動の第一段階の大きな目標はジュネーブで開催されるIDNDRフォーラム(1999.7.5～)での発表であったが、1999年4月、IDNDRの日本事務局である国土庁より発表許可をいただき、研究会で議論の結果、研究内容をすべてウェブサイトで公開し、その要約を発表内容とすることとなった。



IDNDR Forum での広報用アドレスの名刺



ウェブサイトの基本目次画面



津波ピクトグラムのいろいろ

### ウェブサイト構築

本研究活動の核となる部分は、体系化とともに防災に関連すると思われる既存ピクトグラムの収集である。現在、既存ピクトグラム約550、制作したものの約200が出典などの情報とともに画像データをデータベースとして収録済みである。

今回のIDNDRフォーラムを第一段階のまとめと位置づけ、既存ピクトグラム収集のデータベースを核に、それらを研究会で議論してきた体系に分類すること、今後必要となるであろうピクトグラムの項目を提案すること、既存ピクトグラムの出典を明確にし今後も収集を継続すること、今後ピクトグラムを制作・評価するうえで参考となるISO、IECのなかの防災に関連するであろう基本ルールを抽出すること、などなどをウェブサイトでまとめ、インターネット上ですでに公開している。

このサイトの利用方法として、これから防災のピクトグラムを制作しようとする場合の既存ピクトグラムの検索、必要な項目の検索、防災研究者にとっての項目名称による検索、どんな国のどんな組織でどんなピクトグラムが使用されているか等の検索が可能である。データベースは我々が収集できる範囲で、まだ不十分である。またヨーロッパにおいては自然災害が比較的少ないため自然災害系のピクトグラムが少ないと言う事情もある。今後も継続的に収集してゆきたい。

このサイトの利用方法のもうひとつのポイントは、それぞれのピクトグラムをユーザーが評価できること、そして登録できることである。ISO、USDOTなどにおいてもピクトグラム統一のための評価は重要視されているが、防災においては国や地域を襲う外力も異なり、国際的な評価はより重要である。ちなみに「虫害」は日本人にとっては想像しにくく、また「なまず」が地震にむすびつくのは日本だけであり、このような文化的な側面の評価が重要であると考えている。

登録にかんしては言うまでもなくより参考事例を拡大するとともに、著作権を放棄されたピクトグラムの登録により、参加型のピクトグラムシステムを構築

するためである。このように継続的に成長させること、また著作権を放棄することでより広く利用される防災ピクトグラムサイトとしたい。誌面の関係で詳細は省くが、ぜひアクセスし、ゲーム感覚で検索していただき、感想をお聞かせ願いたい。

### 今後の展望

今回のIDNDRフォーラムに参加する機会を得て、感じたこと、また今後の展望に関してまとめてみる。

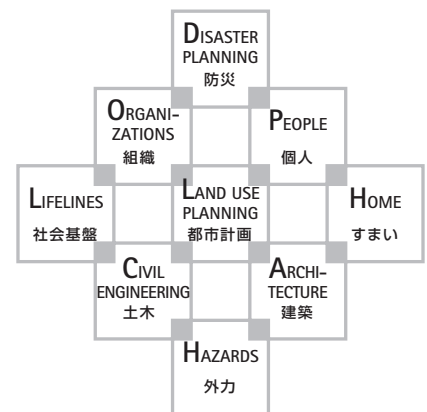
まず最初に、非常に専門性の高いフォーラムであり、GISのシステムから防災教育まで、また日本からはアジア防災センターの設立にかんする説明など非常に幅広い内容が専門分化されている。

その中で、比較的横断型のテーマであるピクトグラムシステムの提案はまだまだやるべきことが残されていると感じられた。しかし、ピクト研究会で林教授がよく言われている「幅広い視点で防災を捉える必要がある」という言葉の意味をあらためて感じるフォーラムであった。参考に林教授が提案されているピクトグラム領域分類項目の図を下記に示す。これは単にピクトグラムの分類ではなく防災全体の捉え方を示唆したものであろう。またデザインという立場からも共同研究により理解を深め、ピクトグラムをデザインすることにとどまらず、防災全体を解りやすく表現し、より具体的提案に結びつけるという役割を認識することができた。

ピクトグラムシステムの今後の展望として、ウェブサイトのメンテナンスとより広報すること、そしてその評価・収集をもとに、より具体的ピクトグラム集としてレファレンスブックの作成、防災サインなどの具体的事例への応用、そして大きな目標として国際的な防災図記号の標準を目指し、研究会を第二段階へ継続してゆきたい。

○資料「防災ピクトグラム研究会」(1997.7~1999.6)

(よしだ はるひで：GK京都副社長)



ピクトグラム領域分類項目図

# e+plant=planet (第九回国際デザインコンペティション・大賞作品)

デザインだけでは世界は変わらない。しかしデザインが示すビジョンは、世界を変える可能性を持っている。いかに理想像をイメージするか、その構想力が求められる。

柴田 巖朗

## 加速度の世紀の終わりとデザイン

ポール・ヴィリリオを引用するまでもなく、20世紀は加速度の世紀として記憶されるだろう。人口・技術・産業・通信、すべてが右肩上がりの急カーブで成長の軌跡を記した。もちろんそこには光と影がある。急激な加速度は軋轢を生み、私たちは21世紀を眼前にして、貧困・環境破壊・内戦など厄介な問題の意識上の当事者になってしまった。

デザインもまた加速度を纏い、工業社会に差し込んだ光としてその歴史を刻んできた。日く、人々の豊かな暮らしを描き、産業を通して夢を実現するデザイン。しかし世界が歪んで見える今、デザインの描く夢(=ビジョン)の内実が、改めて問われている。

## 夢想家のためのデザインコンペティション

業務や広報活動以外にビジョンを提案する場として、デザインコンペがある。なかでも(財)国際デザイン交流協会が隔年で実施している『国際デザインコンペティション(以下、大阪コンペ)』は、ビジョン重視型として知られている。デザイン分野を限定しない大阪コンペでは、交、水、遊といった禅めいたテーマと簡

単な解題だけが提示される。応募者は与えられた言葉から、時代を予見するビジョンを創造しなければならない。そして20世紀最後となった第九回大阪コンペにおいて、(株)GKプランニングアンドデザインのメンバーが中心となったチーム(重野貴、一志学、森田至厚、柴田巖朗、芝操枝、若田邦治)の提案『e+plant=planet』が大賞を獲得した。

テーマは“編む(amu) - intertextuality”。添付された解題文は、“編む”を『交流の原理、インターフェ

イスの原理、リサイクルの原理、異なる多様性を相互に関係づけることにより、グローバルな概念にまで編み上げて行こうとする思い』と定義していた。また『地球上の生あるものすべてのために、デザインは、今何ができるのか、その可能性を探る、新しい提案を期待』ともあった。

## エゴイスティックなエコロジーではなく

テーマと解題文を読んで直観したのは、人間と地球の関係性を、いかにして“編む”という行為に昇華させるか、ということだった。そのヒントは、例えば宮沢賢治の掌篇『虎十公園林』や、生物学者リン・マーグリスの生物システム観などにある。つまり、人間の都合だけを考えた安易なエコロジー思想ではなく、時間軸上に発生もしくは衰退する生命の連関を尊重する世界観の表現である。

## 儂いポエジーから始めよう

『e+plant=planet』は、植物の育成を支援するシステムだ。高分子吸収体繊維で編まれたネットに種子や養分を内包したボール型の人工土壌を取りつける、極めてシンプルな構成である。種子は慈雨を待ち、ネットに溜まる水分を吸いあげ発芽していく。植物の成長とともにネット自体は朽ちていくよう、すべて生分解性素材で構成される。つまり人為が消え、植物が地球に編み込まれることによって初めて完成するビジョンを提案したのである。

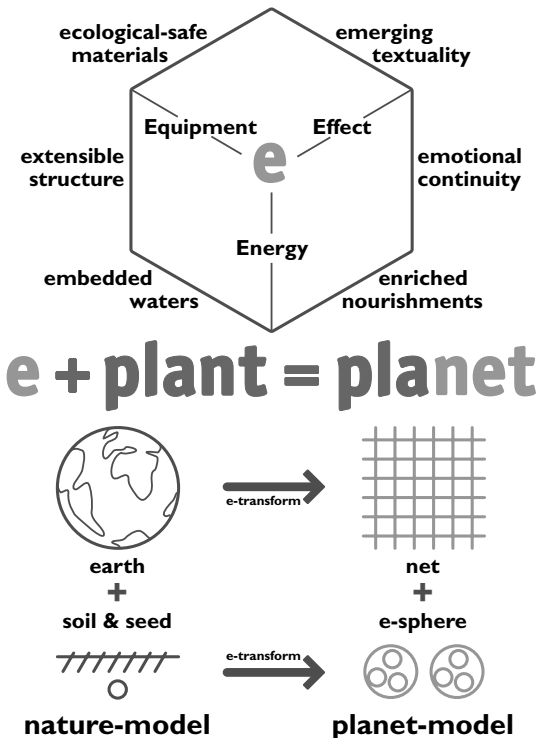
こうした提案は儂いポエジーかもしれない。しかし地球環境が止めようもなく荒廃に向かうとしたら、緩やかに自然に侵食され、原初の姿に戻っていく時間の経過こそが、デザインの対象となるべきだ。

奇しくもコンペで賞を得た12作品のうち、植物を用いて生態系の復興を提案したものが3作品を占めた。離れた場所に生きる人々が、同時発生的にイメージを共有しうる21世紀には、絶望ではなく希望を孕んだ緑を纏った風景こそ、夢見るべきユートピアに相応しいことに?みんな気づき始めたのかもしれない。

参照サイト：(財)団法人国際デザイン交流協会

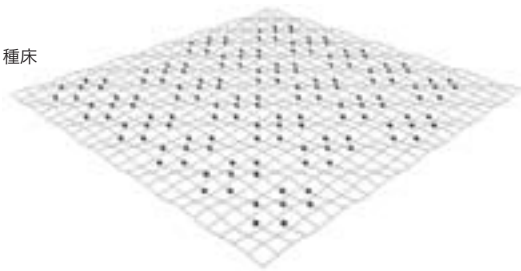
<http://www.jidpo.or.jp/japanesdesign/jdf/index.html>

(しばた いつろう：GKプランニングアンドデザイン室長)

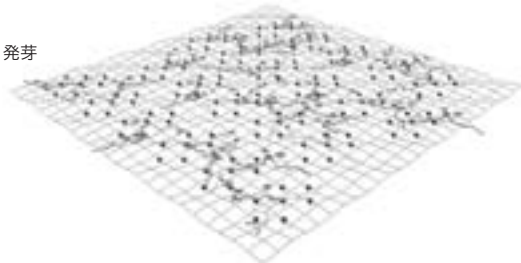


頭文字 e に込められた様々な願い。地球を編み込んでいくキーワード『e + plant = planet』。

種床



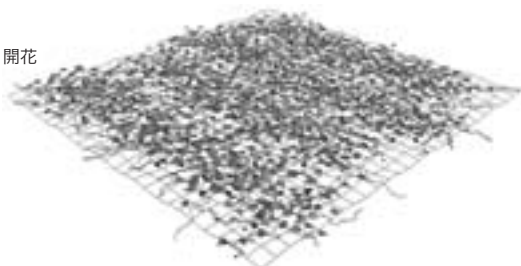
発芽



成長



開花

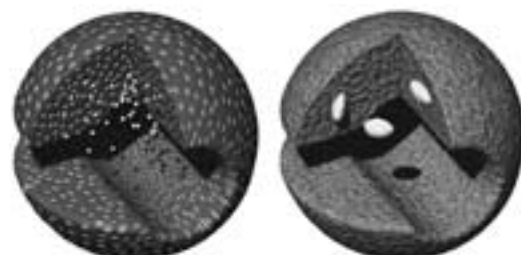


植物の生長過程。最終的にはネット自体も分解され、育成した植物だけが残る。



ネット詳細図

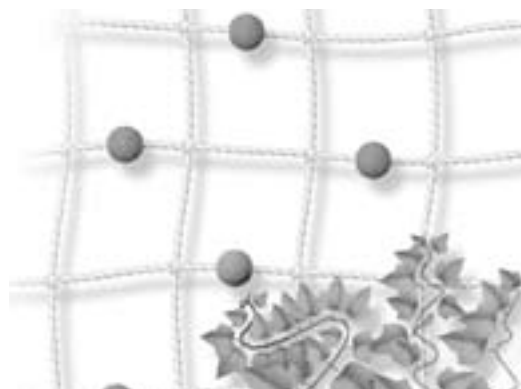
左) ヤシ殻繊維を芯材として、その周囲に高分子吸収体繊維を織り込む。  
右) 高分子吸収体繊維が水分を含んで、種子ボールに水分と養分を供給。



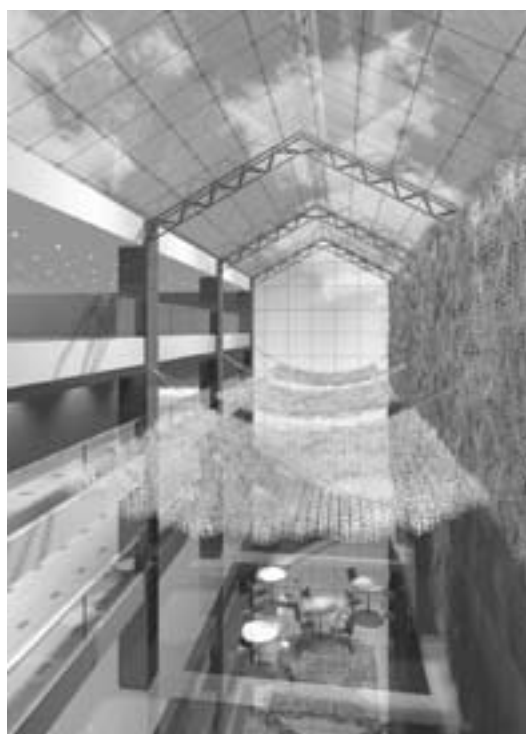
ボール型人工土壌：e-sphere

左) 養分埋込み型、右) 種子埋込み型。

1つの種子ボールに対して、6つの養分ボールを配する。



ネットに組み込まれた種子ボールが発芽して、養分ボールから養分を取り込みながら成長していく。不自由な成育環境が、植物の潜在的な成長能力を最大限に引きだす。



室内環境を自由に緑化することが可能。心理面への好影響だけでなく、空気の浄化や温度調整といった効果も期待できる。

# 元気ができる小さな乗り物

たとえ高齢者といえども便利さや安全性という機能だけでは満たされない、元気の素、「優越感」の世界がここにはある。

山田 晃三

誰が元気で、誰が元気でないのか

電車やバスで「席を譲る」ことが上手なのは65歳以上の高齢者である。反対に中学高校生あたりにはそうしたようにする気配すらない。通勤サラリーマンは、譲らなければという意識はあるもののそのタイミングが掴めず、まあいいか、となる。体が動かないのだ。いったい誰が元気で、だれが弱者なのか。

かつて、足腰が弱くなった高齢者のための「電動三輪車(商品名ミュージスター)」をデザインした。この種の乗り物は最高時速が6km、通院や買い物、散歩などの足がわりとして用いられている。この商品の開発と販売の過程をとおして、ターゲットとした老人たちの生き方の、予想もしない現状に驚いた。

足腰は弱くとも、心は若者のように元気なのである。



高齢者用電動三輪車「ミュージスター」

元気の素——優越感

たとえば、ゲートボール会場にクラブをセットしたミュージスターでさっそうと登場する。みんなの注目がうれしい。そこに外国製の電動車に乗った仲間が現れる。彼の車は時速7km、追い越される。追い越されたときの悔しさと追い越すときの快感。さらにデザインは、周囲の彼女たちへの自慢の種。

これが喜ぶべき老人の生態である。他人より優れていること、優越感を感じられる状況を作り上げること。年齢に関係なく、これが元気の基本ではないだろうか。便利さや手軽さという機能だけでは満たされない、元

気の素、「優越感」の世界がここにはある。

バリアフリーをめざす社会が、単に物的な障害を取り除くだけでは不十分で、危険や難題を乗り越えてでも強い自分を認識できる社会が必要だ。老人の元気の背景には、自己実現の喜びが隠されている。

中年を元気にしよう

ミュージスター開発の第2弾は、元気がない中年をターゲットとすることになった。もともと福祉商品として開発を始めたミュージスター・ブランドだが、感動の所在が、いつでもだれでも変わらないのなら、「高齢者のための…」と限定するより「元気ができるライト・ビークルの開発」と事業領域を拡大したほうがいい。

かくして登場した「ミュージスター・S(スポーツ)」は、二輪のスケートボードに電気動力を付けた「ライト・スケーター」である。時速15km、自転車の速度と変わらない。静かで不思議な走行感覚がある。

40代のとくに「心の高齢者」にぜひ乗ってもらいたい。多少勇気はあるが、風を切って走るとき、ハンドルを傾けてターンするときのスリルを味わってほしい。将来、元気な老人になってもらいたいから。

タウン・モビリティの未来

このミュージスター・Sは、発売はされたが、まだ実験的段階である。公道(歩道など)を走ることが法律上できない(交番の前を走っても捕まることはないが)。こうしたライト・ビークルが市民権を得て、タウン・モビリティとしての役割を担うまでには相当な時間が必要だろう。実験的に開発するメーカーがいくつも誕生し、社会問題化したとき、次のステップが始まる。

戦後50年が過ぎ、日本の発展の中心となった自動車社会は、都市のなかの「人の存在」を小さなものにしてしまった。同時に自らの力で移動することが困難な環境も生まれた。そんななか、人間スケールの小さなビークルの誕生がこれからの街のあり方を変える。

私たちは便利で安全なだけでは幸せにはなれない。自己を高め、強い自分を実感できる社会、もっと刺激的な乗り物が街にあふれ、互いの「優越感」を刺激しあえる社会が必要だ。デザインの役割はそこにある。

(やまだ こうぞう：デザイン総研広島取締役)





開発当初のイメージスケッチ。  
通勤の足としての役割を「カッコよく」させたかった。



実際の購入者は若者というより40代が多いと聞く。  
かつてのスクーター世代かもしれない。



使わない時や階段などでは折り畳んで持ち運ぶ。開発当初の重量目標は8kgだったが残念ながら16kg。持ち運ぶには少し重い。



電動二輪車ミュージスター・S (スポーツ)  
スタートは、片足で地面キックのケンケンスタイル。  
両サイドのパイプフレームの中にバッテリーを内蔵  
したベルトドライブ方式。商品はいずれも三浦工業  
株式会社。デザインはデザイン総研広島。



## ELECTRIC POWERED SKATER

## コンパクトカメラ・デザインの中身

コンパクトカメラのカメラ「らしさ」と「新規性」。よりシビアなバランス感覚が必要とされるバブル以後のフリーランスデザイナーが持つ悩みと葛藤。

佐久間 敏暢

コンパクトカメラの周辺

200万画素レベルの解像度を持つデジタルカメラが一般の人が購入可能な価格で市場に参入してきた。コンピュータやプリンターの高性能化と低価格化という夢のような反比例にともないデジカメ・ユーザも増加している。扱いの良さに加え画質も劣らなくなってきたデジカメが銀塩カメラの市場に食い込んでいるのは想像にたがわない。とは言え道具として置き変わるものであろうか。シャッターを押すときの心情的重さや、加工し得ないよりリアルな外部記憶としてニュアンスの違いはまだまだ大きいように思う。CD (デジタル) もLP (アナログ) を完全に駆逐するには至らなかった。支持したのは昔を偲ぶ人々ではなくそこに新しい価値を見いだした若い世代であった。

コンパクトカメラのデザインは、カメラとしては正統派でないという持って生まれた宿命に対する回答の模索である。新規性を積極的に取り入れる基本的な考え方は現在デジカメによって受け継がれ、デザイン的な棲み分けが難しくなった。さらに小型化のAPSカメラがこれらの位置付けをより微妙なものにしている。もちろん構成がさほど変わらない物のデザインを特に差別化する必要はないのでは、という考え方もある。しかし使い手の気分をより良く反映させ満足してもらうためにも、それぞれの物が持つ特徴をデザインに込め、魅力を引き出してやるのは重要である。

デザインコンセプト

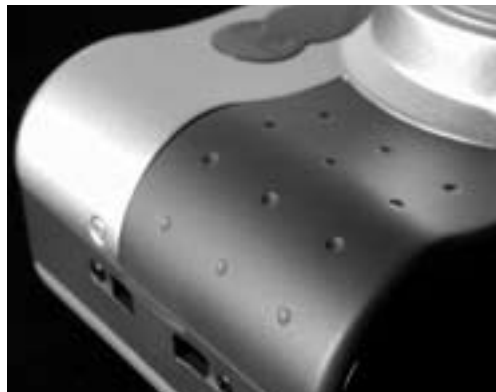
今回のプロジェクトにおいてクライアントから与えられたデザインのテーマは、ズーム付きコンパクトカメラの激戦区に投入する商品のため、アルミ等のパーツを外観に用いて質感/価値観を高めること、および共通設計を見越したデザインであること。内部の設計はおおよそ固まりつつあるという状況であった。

それに対しカメラらしさをいかに表現し、モダンなテイストとの融合をはかるか、アイデア展開を行った。「らしさ」はカメラとしての堅実さ、ユーザの安心感を生む。それが単なるダウンサイズやレトロに陥らないために「新しさ」を盛り込むバランスがポイントとなる。最終案の「カメラらしさ」は、まず鏡胴(=レンズ部分)

をしっかりと見せる点である。ボディになじませ目立たなくしたりはしない。そしてもう一つはアルミの素材感とグリップ部分のツートン構成である。それらは正面からは横一文字に分割してあるが、実際手に取り立体的に見ると前後方向の膨らみによりパーティングラインが緩やかにカーブを描きモダンな印象となる。またレンズに次ぐオートカメラの第2第3の目であるセンサーの存在をモチーフにした全面窓のくびれ形状が愛嬌のあるディテールとして目を引く。上面の操作部トラック楕円の中にまとめ、ツートンで効果的に全体を引き締めている。背面はできるだけシンプルにした。こうして比較的オーソドックスとも言えるデザイン構成に新規性をちりばめて品良くまとめ上げた。世の中を変えていくのに打ち上げ花火も必要だが、こうした地道で丁寧な仕事も重要である。8月の発売以来、国内市場を中心に好調な売れ行きと聞く。

再びコンパクトカメラの周辺

ブームのピークは過ぎたものの、若い女性の間でコンパクトなカメラは日常的アイテムとなっている。ただし思い出を残したり美しい写真を撮ったりという元来の目的より、撮った写真をコミュニケーションの材料にするという意味合いが強い。それを最も端的にヒット商品に結びつけたのが「プリクラ」である。同様にコンパクトなインスタントカメラも数種が発売されている。写真の世界においても立派なカメラを小道具にナンパができるスペック重視のハード(カメラ)指向は過去のものとなり、撮った写真を重要視するソフト指向の時代へと移ろいだ。物に対する質的なこだわりが弱くなった分、見た目商品にとってますます重要な要素になったと言える。重要な見た目をどうデザインするか? 流行りや周りの様子を全く気にしないわけには行かない。とはいえ八方美人でご機嫌うかがいが過ぎると希薄でつまらないデザインになる。バブルを過ぎて生産コストや売れ行きが企業の大きな関心事になっている現在、カメラに限らずデザイン対象のどこにポイントをしぼるか狙いをさだめるデザイナーの前にはより複雑に絡みあった課題が待ちかまえている。(さくま としのぶ:GKプランニングアンドデザイン室長)



図版はすべて 135mm ズームコンパクトカメラ Z-up120VP コニカ株式会社

# ペルチェ方式電子セラーの誕生

ユーザーが庫内の温度を決める適温庫「電子セラー」。  
美味しさと健康にこだわる生活者のための道具登場。

阿久津 雄一

## ペルチェ素子との出会い

1995年末、エネルギー利用に関する研究会にGKメンバーが参加していた縁で、ベンチャー企業のサーモニック社と共にペルチェ素子を使った冷蔵庫のデザイン開発を手がける事になった。ペルチェ素子は半導体に電気を流すと接合面で熱の吸収・発生が起る現象（ペルチェ効果）を利用したもの。当時、ペルチェ素子は耐久性や効率が悪く冷蔵庫の冷熱源としては実用に至ってなかった。同社は独自の研究により信頼性の高いスケルトン素子と呼ばれる新素子の開発に成功。一般的なコンプレッサ方式の冷蔵庫と同等の性能が可能になった。「次世代の冷蔵庫」をテーマにデザインが行われ、1996年7月、この画期的な新素子を応用した初めてのプロトタイプが完成した。

## エコロジー技術と電子セラーの商品化

21世紀を目前に控え、先進工業国にとって地球環境保全は最重要かつ急務の課題として浮上してきた。家電業界では冷蔵庫の冷媒をフロンからオゾン層を破壊しない代替フロンに切り替えたが、地球温暖化効果が強烈なことが半明、新たな課題を背負うことになった。

新ペルチェ素子を使った冷却システムを、エコロジー技術の開発という広範な事業に展開するため、人的・資金的経営資源を整備し新会社エコ・トゥエンティワンが設立された。ペルチェ素子の特徴が生か

せるマーケットを掘り起こし普及をめざす方針から、従来の冷蔵庫とは一線を画した低温から高温まで自由な温度設定が出来る「電子セラー」の商品化に着手する。開発体制は広く衆知を活かすべく、販売、製造、設計等数社との共同プロジェクトで行われた。

## 開発のねらい

すっかり日常生活に定着したワインブーム。ダイオキシンや環境ホルモンが話題になるなか、健康で安全

な食品や手作り食品への志向。エンターテインメントとしてのテレビの料理番組、料理関係雑誌の活況など、生活者の「食」に対する関心やこだわりは確実に高まっている。このような多様な食に対するこだわりの中で、生き物である食品の味と温度との深い関わりに着目し、熟成・発酵食品の最適温度や飲物の飲み頃温度を任意に設定できる商品をめざした。

電子セラーのコンセプトは世界各地の食文化を支えてきた蔵やセラーの再現。蔵やセラーの知恵を現代の生活環境で再現することである。現代の蔵をイメージしシンメトリーで象徴的な外観とした。

## 温度を操る道具

電子セラーの特徴は、ペルチェ素子を使うことで、0~45度まで微妙な温度設定が可能になり、熟成発酵、最適保存、温度調整などができる。これまで、職人ワザであった伝統的・経験的な温度管理の方法を今日の技術で再現した装置。扉につけられた操作パネルにはワイン・日本酒・ビールの飲み頃温度、パン生地発酵、乳酸菌・納豆菌発酵、自ビール発酵、穀物保存などの発酵保存温度の表示がされている。だれでもか温度と食にこだわる、手作り食品を作ることができる道具として機能する。

## サイレント&コンパクト

コンプレッサを使わない電子冷却方式なので振動や運転音がほとんどなく、常に65%以上の湿度を保持できるので、デリケートな食品やコルク栓の乾燥による酸化や振動を嫌うワインにも最適である。

横幅34.5cm、重さ約12kgのコンパクトサイズ。また容量は、様々な使い勝手を想定し導き出した25L。ワインなら縦置きで9本まで保存。ケーキならワンホールがそのまま2個、直径25cmのポウルが収納できるサイズ。キッチンだけでなくダイニングルームやリビングルームにも置けることを意図した。

火起こしの労力を省いたガスコンロ。冷凍食品の流通とともに幅広い層に受け入れられた電子レンジ。伝統的食文化の良さを見直す第三の調理道具として家庭に定着することを期待している。

(あくつ ゆういち:GKプランニングアンドデザイン部長)



1996年7月に提案したプロトタイプ。



温度管理の難しい天然酵母パンや自家製ビール作りも失敗なくできる。



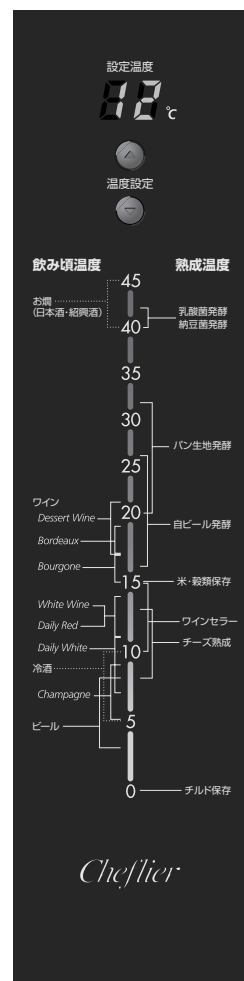
ワインや日本酒はタイプに合わせて飲み頃の温度を設定。



ワインなら縦置きで9本。缶ビールなら500mlが30本、350mlなら38本入る。また、アルミの庫内はニオイを嫌うケーキやデザートなどデリケートな食品の保存にも適している。



幅 345 mm×高さ 477 mm×奥行き 445 mm、重さ約 12 kgのコンパクトなサイズながら、有効内容積約 25L を確保。0～45℃まで1℃刻みの温度設定をユーザーに委ねたことが冷蔵庫との違い。



熟成温度や飲み頃温度も一目でわかるマニュアル付操作パネル。

## GK 設計、デザイン総研広島が 都市景観大賞の景観形成事例部門・小空間レベル受賞

「都市景観の日」実行委員会が主催している、平成11年度都市景観大賞において、GK設計のデザインした「木津南センター前地区」（受賞者：都市基盤整備公団関西支社）、及びデザイン総研広島のデザインによる「防府てんじんぐち駅前広場地区」（受賞者：防府市、防府駅北地区顔づくり委員会、デザイン総研広島）が、景観形成事例部門・小空間レベル＝（助都市づくりパブリックデザインセンター）会長賞とともに受賞した。

木津南センター前地区（デザイン：GK設計）

木津地区は、「関西文化学術研究都市」の中で最大規模の地区であり、主として自然科学系の文化学術研究施設・研究開発型産業施設等からなる研究開発、先端技術産業の拠点として整備が進められている。また、大規模な住宅地としての整備も計画されている。

本整備は、南地区の中心である交差点周辺の一体整備を提案し、地区中央施設と一体となった交差点広場を環境デザインから計画したものである。

木津地区はその地形的条件から北部・中央・南部・東部の4つで構成されており、それぞれが協調する意味合いからハーモニーヒルズ木津と名付けられ、交差点広場にはサークルモニュメントを設けた。サークルモニュメントは、高さ約10mの列柱を交差点を同心円状に取り囲む様に設置し、都市の中心性を都市アートとして表現している。このモニュメントの表面は、日本に古くからある素材（珪藻土）で仕上げ、また、各々の列柱に取り付けたガス灯と万葉色（万葉集で読まれている色彩）の瓦を使用することで当地区の歴史的遺産である「瓦を焼く」ということを表現している（この地区は窯跡が多く出土しており、東大寺の瓦など多く

の瓦が見受けられる）。また、交差点に隣接する商業施設「ソレイユ」と一体的な計画を行うことにより、地区センターとして統一感のある景観を形成している。

防府てんじんぐち駅前広場（デザイン：デザイン総研広島）

防府は、古代からの歴史が積み重なり、それらが今も息づいているまちである。このようなまちの再開発の顔づくりとしてスタートしたこの駅前広場計画は、防府らしさを考える委員会を通じて進められてきた。そして、その結果、駅前広場は防府の歴史イメージを代表する「現代の杜」として整備する必要があるという整備方針がまとまった。

古代防府の歴史性を表している国分寺や防府天満宮には「自然への畏敬から生まれる威厳」があり、中世から近世の歴史性を表している阿弥陀寺や毛利邸などには「自然との融合を計算した曖昧性」がある。これらは、どちらも防府を代表する歴史的空間特性であり、防府らしさを表す地域特性である。このため、本計画では、この古代と中世・近世の歴史的空間特性を駅前広場を構成する垂直性と水平性に分けて表現しながら、1つの風景を織り成すデザインを展開した。

光りの中で茶褐色から赤色に変化するバスシェルのエンタシスの柱は、広大な世界観を意味しながら天に伸び、古代防府の条里制を表すケヤキの太木は、ここが新しい都の中心であることを示している。一方、それらの下に広がる笹の空間は、人の流れを優しく導く曖昧な「<sup>まわ</sup>際の空間（つれづれの庭）」をつくりながら、人々に和みをもたらしている。2つの意味が「重奏」しながら1つの風景をつくるという両義的なデザインがこの広場の魅力となっている。



木津南センター前地区（デザイン：GK設計）



防府てんじんぐち駅前広場地区（デザイン：デザイン総研広島）

## 栄久庵 GK グループ代表、 The London Institute より名誉博士号授与

「仏教をデザインの哲学の中に生かした、シンプルで純粋で偉大なデザイナーである」ことに



学長のウィリアム・スタブズ卿と。独特の大学式服も贈られた。



ロンドン芸術大学より授与された名誉学位証書。

英国にあるThe London Institute (ロンドン芸術大学) から栄久庵憲司GKグループ代表に名誉博士号が授与された。去る9月21日(火)に東京のフォーシーズンズホテルにおいて、The London Instituteの日本で初めての卒業生学位授与式にともない、名誉博士号授与式、名誉フェロー授与式が執り行われた。The London Instituteは、Camberwell College of Arts, Central Saint Martins College of Art and Design, Chelsea College of Art and Design, London College of Fashion, London College of Printingの伝統ある5つのカレッジから構成されている。その名誉博士号とは、アート、デザインおよびコミュニケーション分野において傑出した芸術家に授与されるものである。尚、アーティストの宮島達男氏も名誉博士号を授与された。

当日の名誉博士号の授与式では、学長のウィリアム・スタブズ卿から名誉博士号授与にいたる経緯が紹介され、英国の著名なデザイナーである、ロドニー・フィッチ氏から栄久庵代表の紹介がなされた。フィッチ氏の話は栄久庵代表のデザイナーとしての来し方を賞賛する内容で、特に僧侶であることをデザインの哲学の中に生かし、シンプルであり純粋である偉大なデザイナーとして誉めた。栄久庵代表はお礼の挨拶の中で、英国とは故ミシャ・ブラック氏をはじめ多くの偉大なデザイナーの方々と古くから親交をもたせていただき、英国の伝統と共にいろいろとご教示いただいたことが、今回のこのような名誉ある賞の基となっていると思うと述べた。今後はデザインを通じて更に世界の人々のために力を尽くしたいという抱負を笑顔で語った。

## World Report

### “Design for the World” 批准される

Design for the World による国際的提言・提案活動が公式な場を得て、さらに大きな一歩を踏み出した。

2000年のオリンピック開催を来年に控え、盛り上がるオーストラリア・シドニー市において、去る9月26日より29日までの4日間、国際デザイン会議(Sydney Design 99)が開催された。これは、3つのデザイン国際団体(注)の共同主催で行われたもので、テーマは、「時代の視点」(Viewpoints in Time)。1000人を越す参加者を得て、21世紀に向かうデザインの役割、使命そして様々な課題について色々な角度より熱い討論が交わされた。

これに引き続き各団体の総会が開催され、その議場で、“Design for the World (通称DW)” の発足と今後の活動計画が、それぞれの団体において批准された。こ

れにより、DWの今後の活動は、改めて公式なものとなり、世界へ向けての訴求力も一層力強いものとなる。

「難民のための仮設住居計画」「災害対策のための緊急医療キット提案」「環境問題に対するシステム・道具類の提案」等等、様々な課題に取り組むDWの国際的提言・提案活動は、さらに大きな一歩を踏み出したと言える。

(注) International Council of Societies of Industrial Design (ICSID)  
国際インダストリアルデザイン団体協議会  
International Council of Graphic Design Association (ICOGRADA)  
国際グラフィックデザイン協議会  
International Federation Interior Architects / Designers (IFI)  
国際インテリアデザイナー連盟



Design for the World

# デザイン真善美

## 4. 「古稀」に想う

栄久庵 憲司

子曰、  
吾十有五而志于學。  
三十而立。  
四十而不惑。  
五十而知天命。  
六十而耳順。  
七十而從心所欲、  
不踰矩。

「子曰く、吾十有五にして学を志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲するところに従えども矩を越えず。」学生時代の漢文で馴染みの「論語」為政編の有名な行である。

世界の最上位に位置し、右上がり続ける日本人の平均寿命。最近の厚生省の発表によれば、女性84歳余り、男性77歳余りと言う。かつて、織田信長が「人生僅か五十年」と能を舞った時代は、まさに遙か昔なり。今や「人生八十年時代」へ突入と言える。孔子の言葉も実年齢と合致しにくくなった今日この頃、時代の速度は文化に歪みを齎すのだろうか。

その現代にあって、これらの言葉が受け継がれ、かつそれらに伴う、儀礼・儀典が継承されている場に触れると、心洗われる思いがする。人生の節目節目に、決意を新たにす。我が歩みし道程の半ばに立ち、自らの来し方を振り

返り、行く末を見つめ直す。齢相応に経験を重ねつつ、都度新たな発見を得る。重ねた齢が力となって、次の時代に挑む。「若きし夢の彼岸は、未だ間近ならず。さらなる努力重ねずば、我が人生は全うし得ず。」と納得するもまた、快い。

詩人杜甫の曲江詩の中に、「人生七十古来稀なり」とある。自分が古稀になるなど、思ってみたことも無い私だったが、いざ、迎えると、やはり感慨無量である。何故ならそこに、一度しか無い人生を如何に生き抜くかを示唆する、先人の知恵と工夫を読み取ることが出来るからである。個人の人生など限られたもの。しかしそこに様々な節目を見出し、多くの人々とその意味を共有した時、個々の人生は互いに重なり時代に連なる。かくして、孔子の言葉は、時代を超えて未来永劫、光を放つのである。

(参考) 77喜寿 / 80傘寿 / 88米寿 / 90卒寿 / 99白寿

GKデザイングループ代表

### GK Design Group

- 株式会社GKデザイン機構
- 株式会社GKプランニング アンド デザイン
- 株式会社GK設計
- 株式会社GKグラフィックス
- 株式会社GKダイナミックス
- 株式会社GKテック
- 株式会社GK京都
- 株式会社デザイン総研広島
- GK Design International Inc. (Los Angeles)
- Global Design bv (Amsterdam)
- 青島海高設計製造有限公司

### GK Report No.4

- 1999年10月発行
- 発行人 / 西沢 健
- 編集顧問 / 金子 修也
- 編集長 / 藤本 清春
- 編集部 / 松本 匡史
- 発行所 / 株式会社GKデザイン機構
- 〒171-0033
- 東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル
- Tel:03-3983-4131 Fax:03-3985-7780
- 印刷所 / 株式会社高山